

博士學位論文要約

論文題目： 『宇治拾遺物語』夢説話の研究

氏名： 趙 智英

要約：

本論文の目的は、鎌倉時代の説話集『宇治拾遺物語』に表れる「夢」が、説話構成においてどのような役割を果たしており、どのように説話の方法として用いられているのかを説明することである。

そのために、本論文では『宇治拾遺物語』における「夢」という語を手がかりとして、夢を素材として用いる説話群を対象に、夢の役割を分類し、各説話の方法的特質について、分析及び考察を行った。とりわけ、本論文における研究方法の独自性は、『宇治拾遺物語』の出典を文献だけに限定せず、口承文芸にまで広げて考察することにある。何故なら『宇治拾遺物語』は説話が生成する上で、世間話、都市伝説にも広がりのある伝承の基盤が予想できるからである。さらに、従来『宇治拾遺物語』の研究史では、インド、中国の文献に出典の淵源を求めることが多く、隣国である韓国の伝承や説話、また口承文芸を比較対象として取り上げることがほとんどなかったといわなければならない。

よって、本論文は韓国にも内容の相似する事例があるものは、文献だけでなく口承文芸も含めて積極的に比較対象として取り上げ、『宇治拾遺物語』研究に韓国の類話を取り入れる有効性を提示した。

既存の研究史において、『宇治拾遺物語』の夢に関する研究は数少なく、夢が登場する『宇治拾遺物語』の説話がもつ類話関係の問題が深く論じられてこなかった。

他の文献に出典が認められる説話であっても、他に類を見ない孤立した説話であっても、いずれも『宇治拾遺物語』の編者により採られ、収められた説話であって、説話ごとの表現一つ一つは偶然の産物ではない。そこには、有意性や必然性を見出すことができるのではないかと考える。さらに、『宇治拾遺物語』の編者によって採られた夢という素材や、夢という素材を取り入れ整えられた説話の表現から、編者の編集意識や叙述傾向を読み取ることが出来るのではないかとということがある。斯くて説話の素材としての夢、表現としての夢を視野に入れることで、各々の説話がもっている独自性も明らかになっていくのではないだろうか。このような問いから、本論文では『宇治拾遺物語』における「夢」に焦点を当てた次第である。

『宇治拾遺物語』の各説話に見える夢という素材や表現がもつ有意性、必然性を見出すためには、説話ごとに存在する同一説話や類似説話などとの関係性を探る必要がある。そのため、本論文では、各説話の考察に当たり、類似性の認められる文献資料や口承資料を検討する際は、細かく本文対照を行ない、表現の異同に関する具体的な比較分類と考察を行った。

なお、本論文の構成は次の通りである。

第一章では、まず先行研究を概観し、『宇治拾遺物語』における夢に関する研究の現状から問題点と課題を確認した。そして、既存の研究動向を踏まえ、『宇治拾遺物語』全巻全話にわたって説話の本文に見える計八四例の「夢」という語の用例を全て検討した。本論文では『宇治拾遺物語』の中で、夢が組み込まれている計二五話の説話を「夢説話」と定義し、説話毎に窺える夢の内容やはたらきに応じて、モチーフ、話型、ストーリー展開の三つの基準に従い、類型毎に分類作業を行った。

第二章は、第一章で分類した各類型の説話の中から「A. 夢合せ・夢解き型」に該当する説話を取り上げ、日韓における類話関係を中心に考察した。

第二章第一節では、第四話「伴大納言事」において夢がもつ意味を探り、夢が説話展開にどのように機能しているかを検討した。そして、韓国において第四話と類似性が指摘される事例を提示し、比較考察を加えた。第四話と類似性が認められる韓国の文献説話や口承説話と比較すると、日本との大きな違いは、韓国では最初は夢合せを間違っても、再度夢合せをすることが有効であるという点である。ところが、第四話は、一度夢合わせを間違えた時点で吉夢の力は夢を見た者の手から離れてしまう。この点が、第四話の一つの特質であることが明らかである。

第二章第二節では、第一六五話「夢買人事」における夢の機能と意味について検討した。夢合せや夢解きというモチーフと話型を共有する第四話と第一六五話は、枠組みとしては同じ夢合せ・夢解き説話であっても、個々がもつ主題は異なるを考える。

第二章第三節では、韓国における研究事情も視野に入れて、第一六五話の独自性を導き出すために、夢を売買するという類似性が認められる『曾我物語』太山寺本、韓国の文献説話『三国遺事』、『高麗史』との比較分析を行った。その結果、第一六五話は、夢がもつ意味より夢を売買する行為自体に興味があり、それまでにはなかった新しい夢売買説話の型を成しているといえる。

第三章では、「B. 夢告げ型」のうち、夢の中で神仏から啓示を受け、現実の行動に影響する説話を三つ取り上げ、考察を行った。この三話に表れる夢は、解釈がいない夢であり、夢を見る前と、夢を見た後の転機の契機となる重要な役割を担っているという点で共通する。

第三章第一節では、第一〇八話「越前敦賀女観音助給事」の説話展開における特質を見出し、夢がどのような役割を果たしているのかを検討した。先行研究において、第一〇八話は『今昔物語集』巻一六第七話と同一説話と見做され、すでに確立している観音靈験譚の話型に添って形成された説話であると捉えられてきた。しかし、両説話の本文内容の相違について確認したところ、第一〇八話は、『今昔物語集』巻一六第七話よりも物事に対する貧しい女の心情の変化や感想などの描写が組み込まれており、読者にとって観音の能力自体より、その不思議な出来事に対する女の境遇、思考、行動に興味を寄せる叙述様相を呈する。さらに話末評語では、男女の世俗的幸福を描いた後日談で物語を締めるという点に特質が表れている。そして、第一〇八話において、夢がどのように説話の方法として用いられているのかを検討した。すると、夢は、受動的な貧しい女にとって、願望が叶うという確信を得る決定的な契機となっており、説話展開に大きく機能していることが明らかである。

第三章第二節では、第一三一話「清水寺御帳給ル女事」と第八八話「自_二賀茂社_一御幣紙米等給事」を中心に、『宇治拾遺物語』に描かれた、貧者と夢との関係性について明らかにすることを試みた。この考察に加えて、三話と部分的にモチーフを共有する、韓国に存する夢告げによる貧者の致富譚や、底を突かない呪宝モチーフが組み込まれた事例を紹介し、『宇治拾遺物語』との類似点や相違点を述べた。

第一〇八話、第一三一話、第八八話における夢の役割を総括すると、貧困者にとって、夢は困窮からの救済の合図となり、超越的存在との交信手段として利用され、貧困から富裕への人生の転機という役割を果たしていることが分かる。『宇治拾遺物語』収載話の中で、貧者が神仏の力により利益を得る説話は、一話以外は全て夢が登場する。これは、観音利生を唱える靈驗譚としてではなく、貧者が夢を見て成功へと導かれる、民衆に希望を持たせる物語を描こうとした編者の意識があったと考えられる。

第四章では、前章に続いて、「B. 夢告げ型」の説明型と暗示型に該当する説話について考察した。

第四章第一節で取り上げた第五七話「石橋下蛇事」は、「B. 夢告げ型」の説明型に分類される。なおかつ、その夢がストーリー展開において出来事の種明かしとなっている点が特徴である。一方、先行研究では日本国内に同文的同話が見当たらないため孤立説話と見なされてきた説話でもある。そこで本論文では、第五七話の孤立話としての特徴を検討すべく、夢の役割が説話展開にどのように機能しているのか考えてみた。さらに、蛇と女という共通モチーフを共有する道成寺説話を始め、韓国における相思蛇説話の諸伝承との比較を行った。その結果、第五七話における蛇は、韓国の相思蛇説話に見えるような一途な想い、恋心を打ち解けられないまま化した蛇でもなければ、道成寺説話における愛欲と瞋恚の象徴としての蛇でもないことが顕著となった。第五七話は、女が何故蛇になったかはあまり重要ではなくて、読者にミスリードさせるために蛇を登場させている。不安や緊張感、面白さを与えるための手段として、蛇と女の組み合わせを上手く利用した説話と評価できる。

第四章第二節では、「B. 夢告げ型」の暗示型に分類される第一一二話「大安寺別当女ニ嫁スル男夢見事」と『今昔物語集』巻一九第二〇話との本文の比較を通して、第一一二話がもつ特質を見出し、夢の役割を探ることを目指した。第一一二話は、従来の研究では『今昔物語集』巻一九第二〇話と同文的同話だと看取されてきた。しかし、第一一二話は『今昔物語集』に見える訓誡的言辞を踏襲しておらず、夢に対して罪を心に恥じる蔵人の慙愧の念は描かれない。

さらに、第一一二話は僧俗の寺物私用を戒める性質を帯びながらも、同一モチーフをもつ第五五話「薬師寺別当事」に比べると、夢を見た当人である蔵人が寺物私用の罪に問われるかどうかより、夢の中の仮想体験を通して、僧俗の悪報がもつ罪深さを間接的に戒めることに重点を置いている。すなわち、第一一二話は、仏教の教理へと導くための唱導的意識より、生々しく奇怪な夢の描写と、夢を通じた警告に対する俗人の恐怖心と利己心に興味をもった叙述様相となっている。

以上、『宇治拾遺物語』における夢が、説話構成においてどのような役割を果たしており、どのように説話の方法として用いられているのか分析してきた。

本論文で行った考察から、『宇治拾遺物語』の夢説話の特質を大きく三点に整理すると、次のようである。

一点目は、『宇治拾遺物語』は、夢の内容がもつ象徴性が説話展開に直結する例は極めて少ないということである。これは、『宇治拾遺物語』全巻全話にわたって、象徴夢が第四話に見える一例と第一〇一話に見える一例の計二例のみであり、その他は殆ど啓示夢であることから理解できる。とすると、『宇治拾遺物語』の編者は、夢そのものより、夢を見る行為、夢を売買する行為、すなわち、夢を巡る人間の態度や行動に興味があると考えられる。

二点目は、『宇治拾遺物語』の夢説話は、夢を見る者が俗人である場合が、僧職者より約四倍多い割合を占めることである。この割合から、『宇治拾遺物語』において、夢や夢告げの事例が、俗人に即して語られる傾向が強いということが顕著である。

三点目は、『宇治拾遺物語』の夢説話には、超越した存在の力に対する信仰とその信仰心が実際の成功や失敗に繋がるという考えは強く窺えることである。そこには、宗教的な根拠や仏教思想は見当たらない。『宇治拾遺物語』に表れた僧俗の夢に対する信仰は、現世利益を追究する信仰であって、仏教的土壌の上に立った信仰ではないということが明確である。

とりわけ、本論文では韓国の国家的事業の成果である『韓国口碑文学大系』を活用し、日本と韓国、文献説話と口承説話といった広範な横断的方法を取り入れ、日韓比較研究を試みた。そうすることで、既存の研究史において指摘されてこなかった韓国の説話資料に、『宇治拾遺物語』の類似性が認められることが明らかになった。

夢解きや、夢を売買する事例は、日韓の間で文献だけでなく口承文芸においても共通している。その中でも『宇治拾遺物語』は、多くの夢売買の事例に比べ非常に特徴的な第一六五話を唯一収載している説話集である。これには編纂意図が関わってくると考えることができ、『宇治拾遺物語』の特質でもある。

勿論、本論文で扱った韓国の事例は一部に過ぎず、文献説話、口承説話共に伝承や受容の過程を明らかにすることについては、これからの研究課題としたいが、稿者は、日本と韓国に見える事例を並べたとき顕著となる相違性や類似性一つ一つに、文化が潜んでおり、思想が表れるものだと考える。そのため、一つのプロット、或いは話型を共有する text (本文) に、両国の類似性と相違性が表れる意味を探ることに重要性を感じる。

一方、仏教説話の夢は、超越的な神や仏からのメッセージであり、啓示である。そのことこそ仏教説話が伝えるべき重大な価値である。啓示には予知や地獄巡りの体験や極楽往生の告知など、種類は多いが、結局のところ夢による啓示そのものが奇蹟である。

これに対して世俗説話における夢は、夢そのものよりも夢によってもたらされる出来事の奇異を伝えている。その意味で『宇治拾遺物語』は、宗教性がない啓示夢を「夢解き・夢合せ型」や「夢告げ型」の説話を語るために、説話の方法として上手く利用している。『宇治拾遺物語』における夢は、『宇治拾遺物語』という説話集において不可欠でかつ有効な方法としてのはたらきをしているのである。

なお、本論文では主に話型を基準に分類した「夢解き・夢合せ型」と「夢告げ型」に該当する説話群を扱った。その他、『宇治拾遺物語』の中で、説話展開において夢を見る行為や、夢の内容、夢をやり取りする場面などが記されておらず、「夢」語が内容を伴わず比喩表現

として用いられている用例が存する。本論文では、この比喻表現としての分析には踏み込めなかったため、今後検討していきたい。